

民話と保育

矢口裕康

「民話と保育」、一見結びつかないようにみえるが、そうではない。

保育は人が実践していくものである。そして、民話は語り手と聴き手がなくては存在しない。もちろん、保育も保育士と子ども達の関わりあいの中から出現していくものであることはいうまでもない。ここに、両者には、人と人との言葉と心のキャッチボールがあつて成立する存在であるという共通項を見出せる。

保育の世界に、民話の大切な根幹「語り」を学びとつて導入してほしいと思つての31年間の授業空間であつた。

その主張の一端は、自著

『昔ばなしと幼児教育』（平成7年5月 鉦脈社）

『語りを現代に——ことばではぐくむ子どもの世界——』（平成10年4月 エイデル研究所）

『民話と保育——「個育て」のために——』（平成15年3月 清文堂出版）

『語りの再生』（平成19年10月 清文堂出版）を通して明らかにしてきた。

本考では

●現代の民話を思わせる月刊保育絵本『めめめんたま』の検討
そして

●二〇〇七年秋・日本昔話学会佐賀大会シンポジウム「昔話と子ども」提案、「昔話を保育科学生へどのように伝授するか」を通して、思い感じたことからまとめてみたい。

I 月刊保育絵本『めめめんたま』再検討

私は、福音館書店の

「こどものとも」「こどものとも0。1。2」「こどものとも年少版」「こどものとも年中向き」「かがくのとも」「ちいさながくのとも」を毎月購読している。すると、思わぬ出会いにでくわすことがある。

『とんでいく』（こどものとも通巻五三六号 風木一人さく岡崎立え 二〇〇〇年十一月一日）という絵本がある。この絵本は裏表紙がない。両表表紙で、ガンの子・タカを主人公とした、どちらからでも語れる不思議な絵本である。かつて昔話の語り方の一つに「果てなし話」があつた。が、『とんでいく』はまさに現代の絵本版果てなし話である。絵本にとりあげた鳥も、気弱なガンの子と強気なタカを設定し、これも絵本の面白味となっている。どう語るかは語り手しのだが、『とんでいく』は、子ども達それぞれに思いを抱かせ、かつ余韻そして心の波紋をまきおこすことの出来る絵本といえる。

かつての月刊保育絵本の中に、「めめめんたま」という不思議なキャラクターがいた。

「めめめんたま」は赤には色々なモノがあることを知らせ、赤いモノが大好きで、赤にこだわる、かつ、くいしん坊で、おっちょこちょいな、純でまっすぐな存在である。まるで、子どものような「めめめんたま」を主人公とした絵本は、子ども達の共感をよびおこす現代の民話ともいえそうである。

絵本『めめめんたま』は、一九八二年「おはなしひかりのくに(第6巻第10巻 通巻第70号)」の正月号として出版され、衝撃的なデビューをはたした。と思ったら一九八五年市販絵本(ひかりのくにお話の絵本)として出版されたら、まるで違った絵本として改変されてしまったのである。このことは、かつて『語りを現代に——ことばではぐくむ子どもの世界——』で、「月刊保育絵本とは何か」(P.200-211)でも展開したが、その後の学生との語りを通して、思い感じたことから論じてみたい。

さて月刊保育絵本の『めめめんたま』では、裏表紙下の部分に「おうちのかたへ」という形で、次のようなことが記されていた。「子供たちは、とんち話やお化けの出でくる怖いお話が大好きです。『おはなしひかりのくに』では、毎月いろんなタイプのお話を取りあげ絵本化していますが、今月は、ユーモラスで、ナンセンスなおもしろさのある絵本を作りました。お正月号として、おうちのかたみんなに絵本の楽しさを理屈抜きで味わっていただければと願っています。主人公の『めめめんたま』は、表紙と裏表紙にしか登場しませんが、リズムカルな文章表現によって、赤い色の物を次々に食べていく様子が生き生きと描かれています。火事が起きた時だけ『めめめんたま』がやって来てくれれば大助かりで、消防自動車

もいらなくなるのですがね。終わりからの2場面は、この絵本ならではのおもしろさです。細かい絵を見ながら、繰り返し、『めめめんたま』のいたずらぶりを楽しんでください。(編集部)

（*——は筆者による）
ひかりのくに編集部は、これ等の思いを、子ども達へ家庭へと届けたかったはずである。市販絵本として改変版が出版されたことは、出版社側の意思であるから認めよう。しかし、子どもの世界が色々変化しているからこそ、今、月刊保育絵本のストーリーをもった『めめめんたま』を子ども達へと届け、少なくとも選択できる一冊の絵本としてほしい、と念願するしだいである。

さて『めめめんたま』を授業の素材として取り扱う際、通常、次のような過程を経た上で、二冊の絵本と出会ってもらい、「絵本のすざさ」を感じとってもらっているしだいである。

まずは

①自分の好きな色とは何か、をきいてみる。

(131人中)
総人数

各人数 () 内は人数を表す

- ⑲ 青 (18) 青色 (7) あお (1) こい青色 (1)
- ⑳ ピンク (14) ぴんく (2) ピンク色 (1) うすいピンク (2) うすいぴんく色 (1)
- ㉑ オレンジ (10) おれんじ (1) オレンジ色 (1) おれんじ色 (1) だいたい (2)
- ㉒ 水色 (10) みず色 (2) みずいろ (1)
- ㉓ 赤 (10) あか (1) 赤色 (1)
- ㉔ 白 (9) しろ (1) 白色 (1)

⑨ 緑(2) みどり(6) 深緑(1)

⑧ 黄色(5) きいろ(1) イエロー(1) うすいきいろ(1)

⑤ 黒(4) くる(1)

③ 空色(2) そらいろ(1)

③ 紫色(1) むらさき色(2)

② 藍色(1) あいいろ(1)

④ からし色・ブラウン・うすい若草色・紺

(※筆者は学生が文字表現をする際、日本語としての漢字・ひらがな・カタカナいずれかで表字をしたら、音声言語として発音する際の表字を意識するよう常によびかけている)

学生の好きな色表現、多種多彩であった。男は黒・青、女は赤・桃という発想があるが、女子短大生の好きな色1位は、青系統27人であった。これに水色13人空色3人も加えると43人で、全体の33%、意外な結果とってしまった。まあ、赤系統12人ピンク系統20人橙系15人で47人で36%で、なかなか絶妙なバランスをかもしている。男は何色、女は何色と声高に叫ばなくても、色彩感覚の選択肢も時代と共に、いい意味で変化していると思っただいである。

次には「赤」そのものをとらえた質問として

②赤から思い浮かぶ物(事)、表現をあげてもらおう。

①情熱(28) じょうねつ・熱血・あつい(7)・暑い(3)・熱い・あったかい(2)・あったかいね・ぼかぼか・灼熱・温かさ・大切な・注意・警告・重要・元気(3)・強い(2)・強さ・パワー・はげしい・激しい・迫力・危険(2)・キケン(2)こわい(2)・恐怖・きょうふ・熱気・やる気・いっしょうけんめい・印象的・めだつ・はつきり・鮮やか・勇氣(2)・感動・愛(6)・戦い・ヒーロー・正義の戦士・めでたい・はずかしい・かわいらしい・燃えろ!!・

熱(2)・燃える(2)・辛い・明るい・活発・前進・とまれ・き

もちわるい・気味が悪い・大人・女の子・情熱メラメラメラメラ・

めらめら・メラメラ・ボウボウ・イキイキ

⑤()内は人数を表す。他は各1人)

と、赤から思い浮かぶ表現は54とおり見出せ、こちらも多種多様な思いとしてうけとめた。赤から思い浮かぶイメージ上位5つは、

1位 情熱(28) じょうねつ(1)

2位 あつい(7) 暑い(3) 熱い(1)

3位 愛(6)

4位 危険(2) キケン(2)

5位 元気(3)

であった。この時の学生でないと思い浮かばない表現もあるが、赤をイメージできる一つひとつである。

②また赤といったらどんな物を表現してもらおうと59とおりであった。

りんご(29) リンゴ(3) とまと(1) トマト(23) いちご(5)

イチゴ(3) スイカ(3) サクランボ・ピーマン(各1)

ばら(1) バラ(6) 薔薇(1) バラの花(1) チューリップ(4)

赤のチューリップ(1) 赤ーいちゅうりっぷ(1) 花畑(1) 花

(2)

血(9) 血液(1) ち(1)

あかちゃん(1) 赤ちゃん(2) 口紅(2) 口べに・ほっぺた・赤

面・こわばった顔・けが・おしやれ・ハート・祝い・友達の部屋

(各1)

太陽(13) たいよう・まっかな太陽・太陽の光をいっぱい浴びた

(各1)

夕日(2) 夕やけ・ゆうやけ(各1)

火(7) 炎(10) あつい炎・火事(各1)

消防車(3) 消防自動車・救急車・救急車やパトカーのランプ・キュー
キュー車の光るランプ・危険なもの(消防車消火器など)

ポスト(9) 信号(2) 信号機(1)

今日着ている服・ワンピース・シャツ(各1) Tシャツ(2) 靴
(2) くつ・リボン・ぼうし・ハチマキ・運動会のハチマキ・ペン・
学校のテストの採点されるペン・ランドセル・マツチ(各1)

ふうせん(2) 風船・赤い風せん(各1)

りんご飴・日本の赤まる・イタリア・ドキンちゃん・智恵美ちゃん
(幼稚園からの友人です)(各1)

このように赤は、女子短大生から多種多彩の思いをひきだす力をもっている、といえそうである。

さて、自分の好きな色・赤からのイメージ・赤といったら何の授業展開を経て、『めめめんたま』月刊保育絵本・市販絵本を読み比べてみると、こんな感想をもらった。

④「私はオリジナル(月刊保育絵本の事)の方が好きです。あのシニールさこそ、この絵本の大切な所ではないかと思うからです。赤が大好きで自分の目すらたべてしまうその事の意味を子どもは子どもなりに感じて、もしかしたら大人になって気づくかもしれません。そしてそれでいいとも。新しい方(市販絵本の事)は、こちらにも絵本にはありがちな終わり方だと思えます。私は、絵本に対して大人の方が多くを求めすぎている気がします。絵本を(あるいは本を)よんで、子どもの感性が豊かになるのは確かですが、それは結果論であってどの本からどのように感じるのかはその子によって異なります。大人が子どもにしてあげられるのは、あらゆる本を準備

することで、その中から選び感じるのには子どもに任せるべきではないと思います。大人の過剰な期待が『めめめんたま』を2パターン作らせたのだと思います」

まさに的確な指摘である。

○私は絵本に対して大人の方が多くを求めすぎている気が
ですよね。そして、

○大人が子どもにしてあげられるのはあらゆる本を準備することで、
その中から選び感じるのには子どもに任せるべきでは

同感である。最終選択は子どもにである。また、

○大人の過剰な期待が『めめめんたま』を2パターンを作らせたの
だ

と言えそうである。年齢が低ければ親を含めた大人の側に、選択権がある。大人は、選択の幅づくりを、子どもへと絵本選択を通して具体化していく中で、基本は自分の眼で提示していく。これはこれでいいと思うが、その際の選択の幅は、偏りなく多種多彩であるべきだろう。

ということで、月刊保育絵本として出発した『めめめんたま』(一九八二年「おはなしひかりのくに」)を購入できた子どもだけでなく、今もう一度原本のまま世に問うてほしいと思うしだいである。この作品ほど、授業で語ると学生の目を釘付けにする絵本はない。それは市販絵本の『めめめんたま』ではなく、必ず月刊保育絵本なのである。

月刊保育絵本は、

●年間契約している人だけ、保育所・幼稚園を通して入手できる、
一年限定の絵本

(福音館書店「こどものとも」他のシリーズは、書店でも購入でき

るが他社は不可能)

●安価で薄く本棚でもスペースをとらない新作の絵本である。新人の絵本作家も含めて挑戦的な作品が、毎月みられる。毎月どんな絵本が届くのかを楽しみにまっている読み手の一人としては、全作品がハードカバーとなり市販絵本として出版されるのが不可能であることはわかっている。しかし、現在、市販絵本『めめめんたま』は出版されているが、その原点となった月刊保育絵本も是非子ども達の選択の対象の一つと是非実現してほしい。せつに要望するしだいである。

また、学生からこの二冊の『めめめんたま』に対して、次のような感想ももらった。

⑧「2冊の『めめめんたま』。同じようでも全然ちがう。確かに、絶版になってしまった方の絵本は終わり方が良くないかもしれない。けど、今でも手に入る方の終わり方はもっと良くないと思う。最後、赤がただただ好きで、赤を食べちゃっためめめんたまと、赤以外も食べてしまっためめめんたま。私は、この2冊の『めめめんたま』は、前者が子どもで、後者が大人のように思う。一つのものが好きでそれを何でも集めてしまう子どもと、何でもかんでも欲張る大人。私はいつまでも純粋な前者の『めめめんたま』をまた、売り出して欲しいと思う」

⑨「月刊保育絵本と市販絵本どちらが良いか？私には決められませんが。私は最初月刊保育絵本の『めめめんたま』を読み、少し気持ち悪いと思っただし、かわいそうだとも思いました。私のように感じた子どもは少なくないと思います。そんな子どもは、月刊保育絵本で生まれた感情を持ったまま、市販絵本として出された『めめめんたま』を読む。すると自分の赤い目ん玉を食べてしまうという強烈な

結果がないことにほっとするかもしれません。でもその子にとって、二冊は全く違う絵本として、その子の中に残ると思います。少なくとも私はそう感じました。二冊のめめめんたまは、違うめめめんたま。人間や動物のようにたくさんいるめめめんたまの中の2匹。私はそう感じました」

そして、この学生は絵本についても、次のような思いを書き加えてくれた。

⑩「絵本というのは読んだ後『これ何?』と思うことが多いと思います。言い方が悪くてすみません。うまく言えませんが、読み終わった後に?マークがいくつも残るところの絵はないの?なんで自分の目だって食べちゃうの?なんでめめめんたまの目は赤いの?めめめんたまはオバケなのに、なんであんなにかわいいの?etc:大人になるにつれて、明確なものばかり求めてしまう気がします。この本が何を言わんとしているのか、正解を求めようとしてしまいます。絵本というのはそうであってはいけないものですね。大人にもわからないことを、子どもが考える。大人も子どもと考える。子どもに教わるくらいが絵本の良さを引き出せるのだろうと思います。この歳で改めて絵本と再会し、意味のわからない絵とことば、読み手一人一人によって何通りにもなってしまう絵本独特の感じ。自分が母親となり我が子に絵本を語り聴かせるその前に、絵本と再会できてよかったです」

大人は、とかく正解そして結論を求めがちである。絵本に子どもが出会うとは、その子なりの受け取り方感じ方を大切にしたいということである。月刊保育絵本『めめめんたま』は、聴き手に心の波紋をまきおこす力のある絵本なのである。



(市販絵本)

以上の感想は、すべて二〇〇七年前期「読書と豊かな人間性」の授業を受けてくれた女子短大生の想いの数々である。最後にもう一人、

⑩「まず、私は市販絵本の『めめめんたま』の結末が残念でなりませんでした。『赤』に執着するめめめんたまは、ドキドキ楽しみながら想像していたのに、他の色へと興味を持つことでいきなり身近に感じてしまいドキドキ感がなくなりました。『めめめんたまは他の色に興味を持たないのかなあ』と考えると、『めめめんたまも私達と同じようにコロツて変わっちゃうんだー』と思うのは全然違います。人間味を感じて身近に感じるというのは良い事だということだと思います。と思うけど、私は残念でした。次におもて表紙を比べてみるとやはりタイトルのレイアウトに眼がいく。月刊保育絵本では『めめ

めんたま』というように、内容から考えるとシックな字体で書いてあるように思う。そして、『め』と『め』の文字に少し空間があることで、『めめめんたま』と続けて書くより興味がわく。『めめめんたま』という主人公かあではなく、『めんたまに“め”“め”がつくの？でも“めめめんたま”っていうんだよねえ』と考えて観ることができた。一方、市販絵本では、踊るようなスタイルにポップな字体でレイアウト。楽しい感じはするが、何か考えることはできなかつたかという点、私の場合はNoだ。内容を知らないとしても、主人公のふしぎや『？』という想いがずいぶん減ってしまったように思う。もう一つ、めめめんたまが囲まれている枠を見ても同じように思った。写真のようにピタッと主人公がはまっている月刊保育絵本の枠では、イラストとの雰囲気の違いに興味はわくが、フニャフニャした枠におさまる市販絵本のイラストは、楽しい、ゆかいそうなイメージが先にきて、あまり興味がわかなかった。最後に『めめめんたま』を観聴きして、私は様々な想いをもった。何と口にしたら良いのかわからず、うまく言えないけど、『怖い』『おもしろい』『気持ち悪い』『すごい』『逢いたい』『いたら困る』『近くにいてる気がする』等である。『この絵本はくということを伝えたい』という明確なメッセージはわからないけれど、『一体この絵本は何が言いたいのか？』というような言葉もでてこないほど、あとまであとまで考える一冊でした」

絵本を私が語る際、学生には「観聴き」する姿をお願いしている。絵本を目で観、耳で観、そして心で観、体丸ごとで傾聴してほしいとの願いである。この学生は、しっかりと観、じっくり聴いたゆえの一文といえる。

授業、このような発見に出会えるから面白い。

II 昔話を保育科学生にどのように伝授するか

宮崎女子短期大学も他の大学同様、学生確保生き残り戦略の一環として、インタビュアー入試の導入、春夏オープンキャンパスの開催そして三年前からは学生の保護者を対象にした相談会「保護者会」の開催が、年間行事の中に折りこまれてきた。これ等の行事は土日開催を常とするため、学会へ参加することがなかなか実現できなかった。

二〇〇七年九月十五、十六、十七日日本昔話学会が佐賀県で開催ということで、久しぶりに学会へ参加することができた。それも、一月一日正月、國學院大學へと勤務する後輩から、「昔話と子ども文化」シンポジウムを企画しているので、提案者三人の内の一人として参加して欲しくないかとの依頼をうけてであった。

私はかつて、日本昔話学会シンポジウムに二回参加している。第一回目は、野村純一教授を指導教員にお願いした國學院大學内地留学中に

「昔話の地域性」のテーマのもと「宮崎県を視座として」で発表。

(昭和58年7月3日)「他の提案者は、「日本列島を通して」(稲田浩

二)「国際的視座から」(荒木博之)」

そして第二回目は、

「昔話と子ども」のテーマのもと「昔話と幼児教育——民話伝承の今後——」(平成3年7月7日)で発表した。

「他の提案者は、「子どもの暮らしとことば」(中島恵子)「ベッテルハイム昔話論」(乾侑美子)」

ということ、今回で三度目の正直となるかもしれない第三回目のシンポジウムである。シンポジウム、共通テーマはあるものの立場が違う三人が発表、そして会場には色々な立場の人が参加している。

コーディネーターとなる司会者も大変であるが、なかなか一つの空間とはなりにくいという感想をもっていた。

平成19年9月16日のシンポジウムテーマは、当初「昔話と子ども文化」から、かつて私も参画した「昔話と子ども」で、現在の自分の立場から「昔話を保育科学生へどのように伝授するか」で提案した。

佐賀県、私にとって昔話履歴出発の地、今につながる昔話探索を刻みこむ思い出の第一歩をふみだした土地でもあった。入学と同時に國學院大學説話研究会へ入会した私は、初の夏季探訪(昭和43年8月11日～19日)として、白田甚五郎教授指導のもと、唐津市佐志八幡宮に宿泊させていただき、各地のお爺ちゃんお婆ちゃんから昔話を聴かせてもらったなつかしい土地である。この調査記録は『佐賀百話』(昭和47年6月5日 桜楓社)として出版されている。私をはじめテープレコーダーで録音したテープ抜きも、活字となっている。佐賀県が私にとって昔話探索の旅の出発であるので、かれこれ39年間昔話とむかいあっていることとなる。

さて、この発表を機として、自分の現在をふりかえってみた。

(「昔話と幼児教育——民話伝承の今後——」(平成3年7月7日)発表原稿は、『語りを現代に——ことばはぐくむ子どもの世界——』「3章民話・民話伝承の今後」(P118～135)に掲載)

表① 宮崎女子短期大学における語り手創りのための授業展開

- 1年前期「児童文学」 『宮崎のげなげな語り』 (星の環会 2005年4月10日)
「語り聴かせ入門」『語りを現代に—ことばではぐくむ子どもの世界—』
- 1年後期「保育内容の研究言葉」『語りの再生』 (エイデル研究所 1998年4月1日)
- 2年前期「保育指導法Ⅱ」『民話と保育—「個育て」のために—』
(清文堂出版 2003年3月20日)
「保育内容言葉指導法」(初等教育科)『語りの再生』
(清文堂出版 2007年10月13日)
- 2年後期「総合演習」『子どもに伝えたい年中行事・記念日』 (萌文書林 1998年7月15日)
- 学内サークル活動 「昔ばなし研究会」1978年9月1日～卒業していった学生393名
(現会員6名で399名)「いっぽ会」84人+3人
- 学外保育士職員研修「昔話勉強会」2001年4月14日～月1回90分(14時～15時半)
(都城市相愛保育園)
- 学外ぼらんていあ 1995年9月29日～はにわの会仲間の家「語り部くらぶ」
月1回第4金曜日10時～11時(140回目)
(それ以前に1990年4月20日～1995年 自立支援センターほうれん荘「語り部教室」)
2003年9月30日～社会福祉法人・げんき はっぴーすぽっとDo余暇支援活動
隔月13時半～16時半(25回目)
知的障がいの仲間達の『自分の言葉さがしをしてみよう』



「桃太郎」、おそらく誰でも知っている昔話の代表格であろう。しかし、いざ語ろうと思うと意外と難しいのである。さて、その参考として、次にあるお菓子の土産に入っていた物等を学生に提示した。そして『佐賀百話』中五話「桃太郎」がとりあげられているが、その五話をうまく活かして、私なりの再話、佐賀「桃太郎」を形にしてみた。

という形(表①)で進行中である。私の女子短大生を中心とした語り手創りは、有機的にかつ、かなり活発に動き始めているようである。

9月16日13時半から17時までのシンポジウム「昔話と子ども」にての私の30分の展開は、

①宮崎女子短期大学在職31年目だからこそ実現できた授業、授業外を含めた語り手創りのため、現在やれることから語り始め、

②その授業の一つである「語り聴かせ入門」(2005年前期)の授業の中心テーマとした、「桃太郎をどう自分の語りへと形成していくか」の展開を提示してみた。「桃太郎」という昔話を、自分なりに自分のものとして語れる形を実現する姿をおして、学生一人ひとりが語り手、つまり語り聴かせのできる保育士形成への授業展開を具体化してみた。

③さて、授業を具体化するには二つの要素がある。

△まず教師が語りへと深化するために、どのような素材を用意するのか、用意できるのかである。そして、

△用意できた素材を、どのように展開すると、学生の中に内容化していくかの段取りである。

シンポジウムをとおして、感じたことは色々ある。集約してみると、昔話を語る際の大切なポイントは、

- その昔話のどの部分が一番の命であるかをみきわめること
- 本物、本当とは何かを語り手が意識すること
- 次の世代へ何をどのように伝えていくかの三点ということであろう。

昭和43年8月11日から8月19日まで、私は佐賀県唐津市周辺で、白田甚五郎先生指導のもと、生まれてはじめて昔話の採訪を体験した。乳幼児期はもちろん子ども時代にも昔話を一度もきいたことがなく、かつ横浜市鶴見区出身の自分が、佐賀県のお爺ちゃんお婆ちゃんから昔話を語ってもらった際、「桃太郎のような昔話をきいたことありますか」とききだしたのであることは、想像がつく。

採訪後、私達國學院大學説話研究会の調査記録は、桜楓社より『佐賀百話』として出版された。その百話中に五話「桃太郎」は存在していた。

これら昔話調査者が記録した採訪を活用して語り継いでいくことも、今後の一つ課題であろう。しかしもう一方、せっかく五人の語り手の「桃太郎」が記録として残っているのだから、そこから新たな再話「桃太郎」を誕生させ、語っていくという試みもあっていいのではないかと、今回のシンポジウムをつうじて思った。

佐賀百話

白田甚五郎監修
国学院大学説話研究会編



である。

東松浦郡玄海町有浦上・世戸ミサオさん、東松浦郡相知町牟田郡・原口ことさん、東松浦郡肥前町大字入野・宮崎虎英さんの「桃太郎」を中心に活用させてもらい、新・佐賀県「桃太郎」をつくりあげてみた。こんな形の「桃太郎」である。いかがだろうか。

むかしむかし、ある所にお爺ちゃんとお婆ちゃんがおらしたそうです。

お爺ちゃんは山に柴刈りに行って、それからお婆ちゃんは洗濯して、そして洗濯しおらっしゃたら上の方から、チャポン コロリン っ て、流れてきたって、桃がね。桃が流れてきよるもんで、洗濯ばやめて、桃ば取らしたて。そうして、流れてきた桃をドッコイショウと抱いて、家へ入ったそうです。

そうして

「こういう 大きな桃」

つて、真魚板の上に乗せてですね、

「ああ、一人ではどうにもされん」

と言つて、婆ちゃんが思案しよるところに、お爺ちゃんが山から柴をいなつて帰つて来た。

ところが、

「爺ちゃん、お爺ちゃん、きょうはね、大きな桃が上から流れてきたけん、もったいなか、拾つてきたばつてん、真魚板の上にかいっばい。それで、桃もつたない。爺と婆んでは、どうしようもなか」
 そうしたところが、お爺ちゃんが、

「ああ、こんな時は、子や孫を持ちたいものじゃなあ。子も持たん、孫も持たん」

ところが、その

「わが爺と婆とでは食べてはいかんね」

つて、大きな桃はですね。包丁というてもハミ切り包丁持つて来て、パチンとしたら、中から「ギヤー」という声が出たつて。あつと、包丁を止めたら、中から坊やが、両手をニョツと、出したつて。そうしたところが婆ちゃんが、

「あれ、孫ができた」

つて、一口言うたら、

「はあ、これで何とつけようか」

と、もうすぐに名前がつくところになつたと。

ところが、その爺ちゃんが、

「桃から生まれたから、桃太郎とつけろ」

それで、桃太郎とつけて、近所にですね。

「今日は桃の中から人間が出てきて、桃太郎という孫ができた。それで、利口者になさなけりやいかんけん。それで、あなた達に甘えたり、泣いたりすると、稽古させてくれるな」

そうしたところが、村一番の桃太郎になつた。

そうしたところが、大きくなつて、十五十六に。その子どもが成長するに従つて、このまゝ、腕白じゃなくしてですね、いわゆる、その、まゝ、勝負の気性が迎えになつてきて、いろいろ剣ごとかなか修業したもようですね。そしたら、

「お爺さん、お婆さん、私は今、鬼ガ島という所に、鬼のおつてと聞いたけん、非常に良民を苦しめているけん、私はひとつ鬼を退治しようと思つちよる」

と、こういうと、

「そんな事せんといかんばい。ひよつとすると、どぎやんでもされたら、お前さん身体に傷のついたら、我々はどうするか」
 つて、いったそう。

「いやあ、私は鬼くらいに負けやせんから、おとう、是非やつてください、行きます」

「行くか、お前が行くというなら、お前を止めるわけにもいくまいから、それじゃひとつお前に弁当をこさえてやろう」

つて、きび団子をこしらえてやつたそうですね。

で、きび団子を腰につけて、そうして、やつば鎧とか、兜とか、あるいは刀や弓も持つて行きます。

それから、猿が出てきて、

「桃太郎さん、どこ行きよすかい」

と、いったつて。

「うん、俺は、鬼ガ島に鬼退治に行くが、その非常に乱暴になつて、

良民を苦しめているから、俺、それを退治しようと思つちよる」

「はあ、それは勇ましかですね。私もひとつ、それ、お供させてくれませんか」

こう、いうたそうです。

「うん、俺はお前が来てくれれば、もうおとなしか」

「おう、あんた腰にさげているのは、何んですか」

「これはきび団子。これはきび団子。これはその、鬼ガ島に行く時のお弁当」

「私にも食べさせてください」

「うん、お前が来るなら、食べさせてやる」

と、いわした。そうしたところが、犬がまた来たそうです。

「桃太郎さん、桃太郎さん、あなたの腰にさげているのは何ですか」

「これか。これはおいしかきび団子たい」

「はい、それを私に食べさせなさい」

「ああ、俺や鬼退治に行くから、そのの弁当だからお前たち食べさせるもんか」

「いや、鬼退治に来やすから、私も鬼退治の隊員になりさつちて貰うから、食べさせてください」

こう、いうたそうです。

「それじゃ、やらにやいけんな」

つて、こういうち。猿と犬とを連れて行った。

ところが、雉が、

「もう、お猿さん、お犬さんどこへ行く。桃太郎さんと、どこへ行くか」

「私どもは桃太郎さんの鬼退治に行きやすから、それでお供して行きよるよ。お前来たか」

「いや、私も行きますよ」

雉が、お供することになった。

そうして、鬼の岩屋つてあるつちもなあ、鬼ガ島という所に行きましたが、鬼はいろいろ人間とか、猿、犬の臭いをかぎだして、そしてその、ハハハハ、笑う。もう、その土地の揺れるほどの大きな声で笑つたそうです。もう、小さな土地は、そういうふうで良民ばかり苦しめちつからに、

「きょうは、俺、お前たちば殺しに来たぞ」

つて。ところが、鬼ども一勢に恐れてね、闘わずして、その鬼が降伏したそうです。ええ、もう闘わずして降伏。ああ、昔からその、闘わずして敵を制する者最高なり。闘うて勝つ者、小さい者、闘わずして勝つたと。と、こういつたそうです。そして、いよいよ、

「今から、悪い事せんか」

つて。

「はい。もうしません」

「お前が今まで取つてある、その、良民から取つてある物、みんなやれ」

「はい、あげます」

そして、それら金欄花の玉とか、いろいろな宝物をみんな桃太郎さんに、もう、まあ、差し上げて、そして雉が車に乗せて、犬が押したそうです。それでその、お猿が車を引いたそうです。それで、猿どんが歌うことに、

M その前に金欄宝物

金欄どんすに綾錦

猿が引き出すエンヤラヤ

犬があと押すエンヤラヤ

雉が綱引くエンヤラヤ

と、歌った。

宝物ば貫ち、いい気持で帰ってらしたちゆうて。桃太郎は恩返し
が、たった、たちまちできたって。

お前^まん等、太なったら、桃太郎さんみて、いい若者ならんば。

そればかり。

昔話の伝承そして語り手の存続を考える際、今までの家庭内伝承
中心では限界を感じる。としたら、新作昔話を、読み聞かせをして
いるお母さん達や保育士、幼稚園の先生等の語り手とおして、次
世代へと伝承していく動きもあってよいのではないか。その媒介と
なる一人として、私達教師もなりうるかと思っただいである。

かつて語り手の語る忠実な伝承にこだわった私であるが、もし昔
話が断片的にならざるをえないのであれば、よりこのような形の新
作昔話もあってもよいと思うのである。

保育科の教師の一人として、「保育・子ども・保育者・言葉」を
私なりに考えてきた。

私は昔話を現在も研究の主テーマとしている。私の昔話から見出
した「語り」は、

① ごとごとしていないくて、シンプルな存在。

② 想像力や夢を育てる存在。

③ 聴き手に余韻を感じさせ、心の波紋をまきおこす存在。

と認識している。この語りもうまく活用し、昔話が成立する大切な
要因、語り手と聴き手との応答的關係も、保育の場では必要と説い
てきた。

話と語りは違うのである。話が必ずしも一方通的關係になると
は断言できないが、聴き手の目・表情をもくみとり、心と心のキャッ
チボールを試みた上で応答關係をめざすと語り合えるはずである。
現在、ますます子どもの世界が難しくなっている中、「語り」の
復権のみならず再生をも具体化していきたいと思っている。

『幼稚園教育要領』「言葉」には三本の柱がある。「経験したこと
や考えたことなどを①自分なりの言葉で表現し、②相手の話す言葉
を聞こうとする意欲や態度を育て、③言葉に対する感覚や言葉で表
現する力を養う」、ここに語り手へと自己形成する出発点がある。
この事を心して、保育科学生を語り手へでもある。